

## サイパン陥落と東条英機内閣総辞職

平成23年1月8日 高根台公民館

中部太平洋のマリアナ諸島サイパン島で、日本軍守備隊が玉砕したのは昭和十九年七月ですが、私が強烈な衝撃を受けたのは、何と言っても戦後公開されたアメリカの記録映画を見た時でした。高さ百五十呎のマツビ岬の断崖から、日本人女性が次々と宙に身を躍らせ、あるいはわが子をしっかりと抱き抱えた母親が投身自殺をする。あの壮絶な場面を見た時です。サイパン島は太平洋戦争で初めて住民を巻き添えにした「玉砕の島」でしたが、それは米軍にとっても、「バンザイ・クリフ」とか「シューサイド・クリフ」、「自殺の崖」と呼んだように、やはり衝撃的なことだったのです。

サイパン島は東京から南へ約二千<sup>キロ</sup>。南北十九・二<sup>キロ</sup>、東西の横幅が二・四<sup>キロ</sup>から九・六<sup>キロ</sup>の小さな火山島です。第一次世界大戦まではドイツ領でしたが、大正八年のベルサイユ講和条約で、カロリン、パラオ、マーシャル諸島と共に日本の委任統治領になった島です。砂糖キビ栽培や砂糖を作る製糖業を中心に、三万人近い日本人が定住していましたが、八割は気候風土のよく似た沖縄からの入植者でした。そして海軍は航空部隊の基地を置いて、「絶対国防圏」の最重要拠点としていたのです。

絶対国防圏というのは、昭和十八年二月のガダルカナル撤退以来、戦局の悪化と共に広がり広がった日本の防衛線は、破綻の危機に直面していました。そこで大本営は九月二十五日、戦線を整理縮小してマリアナ諸島からカロリン諸島、西部ニューギニアを結ぶ線を第一線とする絶対国防圏を定め、その確保に全力を挙げる方針を決定したのです。それより先の前線では極力持久戦態勢をとらせ、その間に絶対国防圏の防備態勢を整える。反撃戦力、特に航空兵力を強化して、やってくる米軍に打撃を与え、その進攻企図を粉碎しようというものでした。

ところが米軍の進攻は、日本の予想を越えてはるかに早かったのです。昭和十八年十一月二十四日、ギルバート諸島のマキン島、翌日のタラワ島に続いて、十九年二月六日にはマーシャル諸島のクエゼリン島守備隊が玉砕しました。そして十七日、連合艦隊の根拠地トラック島が空襲されて壊滅的な打撃を受け、絶対国防圏の決戦態勢を整える、その時間的余裕もないうちに、アメリカ機動部隊の脅威にさらされることになったのです。政府も急いでサイパン島の六十歳以上の老人や婦女子を本土に送還することにしましたが、輸送船が潜水艦に撃沈されて千人が犠牲になり、ほとんど送還出来ないうちに米軍上陸となってしまうました。

アメリカ海兵隊二個師団六万七千人のサイパン島上陸作戦が始まったのは、昭和十九年六月十五日でした。迎え撃つ日本軍は、海軍部隊の一万五千人を入れて四万四千人。水際撃滅作戦をとって善戦はしたものの、防御陣地は上陸前の爆撃と艦砲射撃で完全に破壊され、圧倒的な砲爆撃にとてまかないません。大本营が「難攻不落」と豪語していたサイパン島は七月七日、わずか二十二日間の戦闘で、捕虜になった千人を除いて玉砕したのです。

中でも悲惨だったのは民間人です。米軍上陸と共に町を捨て、昼は山の中や洞窟に身を潜め、夜は日本兵ともども島内を逃げ回りました。洞窟に隠れていた兵隊が、泣き騒ぐ子供の声で敵に発見されるのを恐れ、母親が兵隊に強制されてわが子の首を絞めた。こんな悲しい話も伝えられています。七月九日には、北端のマツピ岬に四千人ほどの一般市民が追い詰められていました。海にはアメリカの駆逐艦、上陸用舟艇が群がり、残る三方は米軍の銃口に囲まれています。米軍がマイクで投降するよう呼びかけても、長い逃避行に疲れ切った市民の耳には入りません。「鬼畜米英」と教え込まれてきて、ことに女性は米軍の捕虜になることを恐れたのです。家族で手を取り合い、母親はわが子を高く掲げて海に身を投じました。懸命に崖を下りて海に入っていく者、車座に座って、その真ん中に手榴弾を叩きつけ、集団自決する市民もいました。生き残った一万五千人が米軍に収容されましたが、戦火に倒れた市民は一人を越えたと言われます。

そして、この絶対国防圏の要衝サイパン島のあつけない陥落が、二年九カ月にわたって君臨してきた東条英機内閣を崩壊させることになるのです。それも皮肉なことに、東条が陸軍大臣のまま参謀総長まで兼務して、この異常ともいふべき権力の集中が、「反東条」の動きに火を点ける形になりました。東条内閣は、一般的には「独裁政治を行って、ひたすら戦争に突き進んだ内閣だ」。こう思われています。東条は昭和十六年十月、組閣の本命を受けると、中将の任期がまだ終わっていないのに、海軍大臣になる嶋田繁太郎が大将では具合が悪いと、特例で大将に昇進し、陸軍大臣を兼務するため現役のまま首相に就任しました。現役大将で首相になった例は、明治・大正の頃に山県有朋、桂太郎、寺内正毅と三人いますが、陸相まで兼務したのは東条が初めてです。しかも組閣の際、治安に備えるためだと言って内務大臣を兼務し、一時的には外相、文相から拓務相、商工相、軍需相まで兼任しています。

東条は自分の権限を強化し、憲兵政治で国内に睨みをきかせましたが、その東条でさえ、どうにもならないものがあつたのです。統帥権と言って、軍隊を動かす最高指揮命令権です。陸海軍の作戦用兵は、統帥部と呼ばれる参謀本部と軍令部で決めてきましたが、明治憲法ではこの統帥権は天皇の大権として、内閣から独立したものとされました。ですから陸軍大臣を兼務して、言わば陸軍の人事権を握っている東条でも、作戦に介入することはおろか、正確な戦況さえ知らされ

ないことがあつたのです。主力空母四隻を失ったミッドウェー海戦の大敗を知らずに、天皇から知らされて愕然としたという話があります。国家予算の編成権は内閣にあつても、八割以上が軍事費というのでは、どうしたって作戦用兵を盾にとる統帥部の意向に左右されることになります。東条は戦局の悪化で、戦争の総合指導権、つまり統帥権を掌握しようと思つたようになるのです。

戦争が長引いて、国民生活の窮乏化と共に、東条批判も日増しに高まつていました。私はあの戦争中、憲兵、特高警察の嚴重な監視下にあつて、庶民の批判精神は鋭く、またたくましいことに感心するのですが、「愛国行進曲」の「見よ東海の空明けて」をもじつて、「見よ東条の禿げ頭」と歌つたんだそうです。この替え歌は「そびゆる富士も眩しかり あゝの禿げどけると悔し泣き 雲に隠れて大むくれ」と続きます。政変説も飛び交い、東条は秘書官に「少々戦況が停滞しただけで、これだけのデマが飛ぶのだから、全く日本人というのは逆境に弱い」。こんな愚痴をこぼしていますが、昭和十九年の新年はもっぱら神頼みといった感じでした。元日は首相として靖国神社、明治神宮参拝。三日に上野寛永寺に詣でて、五日、六日は戦勝祈願に伊勢神宮。八日には今度は陸相として嶋田海相と連れ立つて、再び靖国神社、明治神宮参拝です。

東条はまた、あちこちとよく視察して、独特の細かな目で欠点を発見しては、お説教する人でした。熊谷の陸軍飛行学校を視察した時です。生徒を集めて「敵の飛行機は何によつて落とすか」と質問したんだそうです。高射砲、機関銃、機関砲に続いて、最後の生徒が「自分の気迫で体当たりします」と答えると、「今の生徒、大いによろしい」と誉めたということです。「銃に頼つて敵を撃墜しようと考えるのは邪道である。どこまでも魂によつてぶつかつて行かなければ、敵機を落とすことは出来ない」。この精神主義が東条の政治哲学であり、また戦争指導を貫く基本原理でしたが、戦況の悪化は、神頼み、精神主義だけではどうにもなりません。東条にとつて、戦争を自分の考え通りに進めるためには、どうしても参謀総長のポストが必要になつたのです。

トラック島の連合艦隊根拠地が壊滅すると、東条は二月十九日、「人心一新のため」と称して内閣改造を行い、三人の閣僚を交代させました。そこへ統帥部から、船舶徴用の要求が出てきたのです。輸送船増強のため、「ない袖を振れ」という要求で、呑めば民需に回す船がなくなり、生産面に大きな影響が出てきます。拒絶すれば、統帥部との深刻な対立になります。東条は嶋田海相と陸軍次官の富永恭次を呼んで、深夜まで協議したといひます。そして二十一日、陸軍の三長官会議を開いて、陸軍では大臣、参謀総長、教育總監の人事は、この三人の協議によつて決めるのが慣例になつていましたが、参謀総長の杉山元に「マーシャル、トラック方面の戦況は一刻も猶予出来ない。ここは自分が出るのが一番良いと思う」。こう言つて、交代を迫つたのです。杉山が「統帥と政務を分けるのは伝統

の鉄則だ」と拒否すると、東条は「それでは戦争完遂に自信が持てないから、直ちに辞職する」と言います。教育総監の山田乙三には、前夜のうちに富永次官をやつて同意を取り付けていました。山田が杉山を説得し、参謀総長を陸相の東条が、軍令部総長を海相の嶋田が兼務するという、日本の陸海軍史上初めての異例な人事となつたのです。東条も忙し過ぎて、手が回らないことは承知していたのでしよう。参謀次長を二人制にして、高級次長には士官学校同期の後宮淳大将を据え、海軍の軍令部次長も二人制になりました。

昭和天皇は「憲法上、問題はないか」と賛成しかねる様子でしたが、内大臣木戸幸一の日記によると、東条は「今日の戦争の段階は、作戦に政治が追隨する形ですから弊害はないと信じます。統帥と政務は厳に区別して扱います」とはねつけています。陸軍部内にも強い批判はありましたが、中でも「東条独裁、東条天皇になりはしないか」と懸念を示したのが、結核で療養中の秩父宮陸軍少将でした。侍従武官を通じて三回も質問状を出していますが、三回目の六月十六日には「総理が総長を同一人で兼ねる形式は、戦争指導上理想的なものか。統帥部幕僚と政府幕僚の意見が一致しない場合、東条はどうするか」。こういった内容で、東条も腹に据えかねたと見えて、書面での回答で開き直っています。「国務と統帥の根本は総て上御一人の御大権に存しています。東条はこの本義を拳々服膺して御奉公していますから、御心配の必要は御座いませぬ。臣節を尽くすにおいて不十分の点あらば、御前において割腹してお詫び申し上げます」

東条は「これで政戦両略が一本になり、うまく行くぞ」と、自信満々だったといいますが、所詮は形式的なものに過ぎなかつたのです。自由主義的な政治外交評論で知られた清沢冽は、朝日新聞の出身でしたから、朝日の記者から聞いた情報なのでしようが、その実態を日記に皮肉たっぷり書いています。「東条首相は参謀総長就任につき、その言動を極度に警戒しているそうだ。例の肩章、参謀肩章をかけているときには参謀総長東条大将であり、断じて総理大臣ではない。さきごろ伊勢神宮に行ったときは参謀総長の資格であつたそうで、その点厳格である。なんでも右翼方面から突込まれて以来のことか」。右翼団体は東条によつて強制的に解散させられ、不満を募らせていましたから、「東条の参謀総長兼任は憲法違反だ」などと騒ぎ立てていたのです。東条の秘書官は、参謀総長として上奏するとき、参謀肩章を忘れてこつぴどく叱られたそうです。

とにかく首相官邸に居るのは、ほんの三十分ぐらい。陸軍省、参謀本部、軍需省と回り、また視察好きで街へもよく出かけました。参謀本部本部作戦課の戦力班長で、戦後自衛隊陸将になつた高山信夫は、「一刻を争う大本営命令あるいは参謀総長指示を受けるため、幕僚がいかに苦労したか、想像を絶するものがあつた。深夜やつと首相官邸でもらう有様で、東条退陣で事務処理は速決化された」と、その著書に書いています。

東条が参謀総長になつてすぐ、三月八日からインパール作戦が始まっています。作戦課が「今や太平洋の対米決戦に全力を結集すべき時、ビルマに戦力分散は許されない。その余力があるなら、フィリピンやマリアナに転用すべきだ」。こう言つて強硬に反対したのに強行され、惨憺たる失敗に終わった作戦です。もつとも作戦を認可したのは前総長の杉山でしたが、肝心のマリアナの防波堤作りは遅れに遅れたのです。もちろん大本営も、絶対国防圏の決戦態勢作りは急いでいました。二月二十一日、東条が参謀総長になつた日ですが、満州の関東軍や朝鮮軍、支那派遣軍から精銳部隊を抽出して八つの連隊規模の派遣隊を編成し、中部太平洋への派遣を発令しています。二十五日には小畑英良中將を軍司令官とする第三十一軍を編成し、サイパンに司令部を置いて中部太平洋の陸軍部隊を指揮させることにしました。

東条は、これらの部隊をどこに配置するか、いちいち采配を揮っています。ところが例によつて、太平洋の島々にわずかな兵力の分散配置なのです。参謀総長になつた時、「わが肉を斬らせて敵の骨を斬り、わが骨を斬らせて敵の生命を断つ覚悟が必要だ。たとえ一部の島が占領されようとも、ものは考えようで、むしろ敵の背後にわが基地があると思えばよいのだ。そして機を見て挟撃、反撃すべきである」。こんな訓示をしています。この程度の戦局認識なのです。孤島の防衛が如何に難しいか、制空権、制海権のない所に孤島の防衛は成り立たないのに、この教訓は生かされませんでした。

中部太平洋に派遣された兵力は最終的には十六万人余りになりましたが、このうち一万九千人が絶対国防圏より先の島、つまり専守防衛に徹して、これ以上兵力増強はしないと決めた島に送られているのです。しかも、連合艦隊がもうトラック島を撤収した後だというのに、トラック島周辺の島に四万人も張り付けています。「西部ニューギニアの戦況が急迫した」というのが理由でしたが、その結果として、急がなければならぬサイパン、グアムの防備強化が一番後回しにされたのです。そして米軍が素通りしたため、太平洋の島々に取り残された兵隊は、飢えにされされながら遊兵、遊んでいる兵隊となりました。実に無駄なことをしたもので、例えば、昭和十九年四月に西カロリン諸島のメレヨン島に派遣された部隊は、米軍の上陸もなく、空襲による戦死者が百七十五人だったのに対し、栄養失調、伝染病、脚気の戦病死者が四千八百人にも達し、無事復員出来たのは千六百人余りでした。

サイパンに増強第一陣が到着したのが、三月十九日です。四月七日には斎藤義次中將の第四十三師団派遣を決定しましたが、名古屋で編成された六番目の師団で、兵隊の大半は年とつた応召者という急造師団。訓練もそこに戦場に送り込まれることになつたのです。この師団主力がサイパンに到着したのが五月十九日。一カ月も経たないうちに米軍上陸を迎えるのですから、余りにも遅すぎまし

た。しかも輸送船六隻で千葉の館山を出港した後続部隊は、六月四日から六日にかけての潜水艦攻撃で五隻が撃沈され、壊滅的な打撃を受けてしまったのです。防御陣地を作るための資材輸送も遅れ、特にセメントの不足は深刻でした。水陸陣地にしても、多くは素掘りのタコ壺程度、貧弱なものだったのです。

海軍は、どうだったのでしょうか。前年の昭和十八年七月、中部太平洋での航空決戦に備える基地航空部隊として第一航空艦隊編成し、計画通り整備されれば千六百五十機になる予定でした。また海上決戦兵力として十九年三月一日、小沢治三郎中将を司令長官とする第一機動艦隊を編成しています。完成したばかりの新鋭空母、二万九千三百トンの大鳳をはじめ、大型、中型、小型の空母三隻ずつ九隻を揃え、艦載機も新鋭の艦上爆撃機「彗星」、艦上攻撃機「天山」など四百五十機。海軍が、今度こそと期待した大機動部隊です。三月四日には中部太平洋方面艦隊を編成、司令部をサイパンに置いてこの方面の海軍部隊を担当させ、司令長官には南雲忠一中将が就任しました。ハワイ真珠湾攻撃の時、またミッドウエー敗戦の時の機動部隊指揮官ですが、この海軍の決戦態勢もまた机上の計算でしかなかったのです。第一航空艦隊の整備は、輸送船が潜水艦に狙われて機材の補充が思うようにいきません。パイロットの訓練不足による消耗、相次ぐ空襲にやられて、六月初めの兵力は五百三十機、定数の三分の一にも達しませんでした。第一機動艦隊の方も、すでに優秀なパイロットを数多く失っています。いくら新鋭機を揃えていても、パイロットの技量がついていけなかったのです。

アメリカ統合参謀本部は三月十二日、マリアナ攻略を決定し、太平洋艦隊長官ニミッツに六月十五日のサイパン上陸を指示しています。前年暮れの米英連合幕僚会議では、マリアナを攻略して日本本土への戦略爆撃基地にすることで合意していました。最初は十月の予定でした。それが繰り上がったのは、トラック島やマリアナ空襲で、日本の基地航空部隊の力が意外に弱いことが分かったからです。そしてもう一つ、決定的な要素となったのが、「超空の要塞」と言われた長距離爆撃機B29だったのです。最大速度は戦闘機並みの五百七十キ。四トンの爆弾を積んで五千五百キ。飛べますから、サイパン・東京間二千キ。を楽々往復出来ず。一万キ以上の高高度飛行で高射砲弾の心配はなく、戦闘機の迎撃もほとんど不可能です。全長三十キの機体は低空飛行の場合に施す迷彩の必要もなく、銀色のアルミの地肌をきらきら輝かせていました。私なんか初めて見た時、これが敵機だということも忘れてしまうくらい、惚れ惚れするほど美しい飛行機でした。昭和十七年九月に試作一号機が完成し、量産態勢に入っていました。安全に大量の爆弾を投下出来る理想的な戦略爆撃機です。サイパン攻略は、対日戦勝利の近道として、この新戦略のために時期を早めて実施されることになったのです。

日本もB29の情報は掴んでいました。高松宮海軍大佐は昭和十八年五月の日記に、中島飛行機の社長中島知久平から聞いた話として、B29の大量生産に触れ、

「斯克テ旧式ナ戦術思想ノ不敗ノ態勢ハ根底ヨリ覆サレテオルコトニ氣ガツク」と書いています。東条首相だつて知つていたでしょうし、米軍の次の進路がサイパンに向けられると思つて当然だつたのです。昭和天皇も「マリアナを取られると本土が空襲にさらされる」と心配されましたが、大本營の判断は極めて甘いものでした。十九年五月二日、天皇も出席して開かれた「当面の作戦に関する陸海軍統帥部の御前研究」で、嶋田軍令部総長は統帥部の見解をこう述べています。「マリアナ、小笠原の攻略には相当の犠牲を覚悟しなければならぬし、確保するのも容易でないから、まずわが基地航空兵力を減らしてから、攻略を企図する公算が大である」。つまり、空襲してくることはあつても、上陸作戦はまだ先だろうと言ふのです。続いて行われた質疑応答でも、後宮参謀次長は「小笠原、マリアナ地区には相当の守備兵力を配置してある。特に五月中旬以降輸送予定の第四十三師団が上陸すれば、敵の攻略企図に対して自信がある」。こう答え、東条参謀総長も「サイパンは難攻不落です」と断言したのです。

いったい、どこから出た確信なのでしょう。陸軍首脳部が戦力と考へているのは、相変わらず兵隊の頭数だけ。しかもその兵力増強も、あくまで進行中の計画に過ぎず、防御陣地も素掘りのタコ壺程度だと言ふのに、その目で確かめたものではないのです。ガダルカナルでもインパールでもそうでしたが、陸軍省や参謀本部の高級幹部は、安全な南方視察には出掛けても、戦闘苛烈な第一線には一人として足を運んでいません。「これで大丈夫」と言ふのは、指令さえ出しておけばその通りに行くはずだと考へる、官僚的な自信に過ぎなかつたのです。

連合艦隊長官は古賀峯一が飛行艇でダバオに移動する途中、遭難して殉職し、五月三日付で豊田副武大將が就任していました。嶋田軍令部総長はこの日、連合艦隊に「あ号作戦」と名付けた作戦方針を指示しています。敵機動部隊をパラオ近海または西カロリン付近に誘い出し、予めこの方面に展開した第一機動艦隊、第一航空艦隊の全力を投入して、捕捉撃滅しようというのです。ただこの作戦計画は、敵の次の攻略目標をパラオを第一とし、マリアナへ来る公算は少ないと見た誤つた敵情判断、さらには油を運ぶ油槽船の不足が大きな要素となつていたので、内地にはすでに大艦隊を動かすだけの油がなくなつていて、第一機動艦隊の待機地点には燃料補給に便利なフィリピン南西部のタウイタウイが選ばれていました。しかも艦隊に同行する油槽船が足りないため、艦隊の行動半径は千六百キ。に限定されてしまったから、決戦海面も必然的にその距離に相当するパラオ近海に求めることなつたのです。言つてみれば、日本海軍の燃料事情を優先させた、「こうなつてほしい」という作戦計画でした。

空母九隻、戦艦七隻、総勢七十三隻の第一機動艦隊がタウイタウイ泊地に集結したのは五月十九日です。豊田連合艦隊長官は翌日、「あ号作戦」開始を発令、第一航空艦隊もパラオ、マリアナ、ヤップの三方面に航空部隊を展開させ、決戦態

勢を整えたのです。そこへ二十七日、米軍が西部ニューギニアのビアク島に上陸して来たことから、混乱が起きてしまいました。ビアク島は絶対国防圏から除かれていて、現兵力で持ちこたえることになっていたのに、豊田はヤップ島の九十機、マリアナの百機を送って、ビアク島での反撃に当たらせました。陸軍も増援部隊を派遣することになり、雄渾からとった名称なのでしょう、「渾作戦」と名付けましたが、当初の方針を変更してまで「渾作戦」にこだわったのは、ビアク島上陸部隊に打撃を与えることにより、敵機動部隊をパラオ近海に誘い出し、「あ号作戦」の端緒を開く狙いからでした。

ところがアメリカ機動部隊がやって来たのは、マリアナだったのです。六月十一日からの連日の空襲が続いて、十三日にはサイパン島に対する艦砲射撃も始まりました。迷っていた豊田長官もようやく「渾作戦」中止、「あ号作戦決戦用意」を発令したのですが、基地航空部隊はこの空襲で百五十機を失ってしまいました。しかもニューギニアに派遣された航空部隊は、「渾作戦」の消耗に加えて、パイロットの多くがマラリアやデング熱にかかって復帰が遅れました。十五日に米軍上陸で「あ号作戦決戦発動」をした時、本来なら第一機動艦隊に呼応して、少なくとも敵空母の三分の一を撃破することが期待されていた基地航空部隊は、サイパン島周辺にわずか三、四十機しかなく、ほとんど用をなさなかったのです。

それでも、陸軍は樂觀していました。十一日は日曜日で、東条は用賀の私邸に参謀本部作戦課長の服部卓四郎大佐、作戦参謀の晴気誠少佐らを集めて歓談していました。服部は、ガダルカナル敗戦の責任をとらされる形で一旦転出しましたが、その転出先も陸相秘書官。前年十月にはまた作戦課長に返り咲いたのですから、よっぽど東条のお気に入りだったのでしょう。そこへマリアナ空襲の電話が入ってきて、東条は「日曜日の空襲とは、敵もやるじゃないか。日曜日に働いてキリストさんに怒られんかな。敵、北より来れば北条時宗あり、東より来れば東条あり」。こんな冗談を言って、参謀本部に戻る服部たちを送り出しましたが、まさか、この空襲が本格的攻略の露払いであり、サイパン攻防戦の帰趨が自分に総辞職を迫る強い圧力になるうとは、知る由もなかったのです。

連合軍の反攻は、ヨーロッパ戦線でも始まっていました。六月六日、フランス大西洋岸のノルマンディに大部隊を上陸させたのですが、参謀本部はこれも「絶対国防圏作りに有利」と見たのです。作戦課の会議では「いかに米軍といえども、太平洋方面で同時に大規模な作戦を敢行することは無理だろう」。従ってサイパン空襲も単なる機動作戦で、上陸はあり得ないとの判断が大勢を占めました。参謀本部の「機密戦争日誌」は、「当分の間、太平洋方面は積極的作戦停滞の公算あり。ただし、政治的に本土空襲することあるべし」。こう書いていますが、アメリカの戦力を過小評価したもので、米軍のサイパン攻略部隊はこの六日、マーシャル諸島を出発していたのです。海軍の飛行機、潜水艦による索敵活動も、「あ



号作戦」の決戦海面をパラオ近海としたため、専らその南の海面、マリアナから南は全くお留守になっていました。サイパンの最高指揮官である小畑第三十一軍司令官が、幕僚を連れてヤップ島視察に出かけていたことが、現地軍も大本営同様、米軍のサイパン来攻はまだ先のことと予想していたことを物語っています。

サイパン守備隊は十四日になって、「今夜半モシクハ明朝、敵上陸ノ公算最モ大ナリト認ム」と打電して来ました。海も空もやられっ放しで、陸軍守備隊は歯軋りする思いだったのでしよう。その忿懣を「敵ノ振舞ハ傍若無人、帝国海軍イズレニアリヤ」と電報にぶつけています。ところが東条参謀総長は参内して、「もしサイパンに来ても十分確保出来ます」と、自信のほどを上奏したのです。服部作戦課長は「サイパンに来たら思う壺だ。待望の殲滅戦を行い、敵の戦意を粉碎する」と豪語していましたし、真田穰一郎作戦部長も「敵は中部太平洋方面で一番堅固な正面にぶつかることになる。これは敵の過失だ」と言っていました。

この陸軍の強気は、五月初めにマリアナを視察して来た晴気参謀の報告によるものなのです。「たとえ海軍航空隊がゼロになっても、第四十三師団が到着すれば、普通は正面一基。当たり三・三門の大砲があればいいところを、今度は五門配置するから、これだけあれば絶対敵を叩き出して見せる」。こう言うのですが、一基。当たり何門といった戦術上の法則などありません。まして一基。百門とでも言うのならともかく、三・三門が五門になっただけなのです。ガダルカナル以来の米軍の猛烈な砲爆撃、圧倒的な物量作戦をどう考えていたのでしょうか。ことに弾薬の不足は決定的でした。高射砲弾が一門二百発、二十ミ機銃にしても千五百発で、十分間の連続射撃で使い果たしてしまう量なのです。責任を感じ続けている晴気少佐は、終戦の翌日、家族に「サイパンにて散るべかりし命を今日まで永らえてきた予の心中を察せられよ」。こういう遺書を残して、陸軍省で自決しています。

米軍の上陸作戦は十五日午前七時四十五分、七百台の水陸両用車で始まりました。小畑軍司令官が不在のため第三十一軍参謀長の井桁敬司少将が指揮をとり、榴弾砲十二門による水際撃滅作戦で米軍に千五百人の死傷者を出させたものの、夕方には長さ六・四基の橋頭堡が築かれてしまいました。参謀本部の電報綴じには、赤鉛筆で「弱虫」とか「井桁のバカ」とか、殴り書きしてあったそうです。夜半からの総攻撃も、水陸両用車三十台、戦車八台を破壊しましたが、ロケット砲まで備えた米軍の反撃に死傷者が続出、失敗に終わりました。

大本営は十六日、「マリアナ諸島に來襲せる敵は十五日朝に至りサイパンに上陸を企図せしも、前後二回之を水際に撃退せり。敵は同日正午頃三度來襲し今尚激戦中なり」。こう発表したのですが、陸軍最初の原案では「わが陸軍守備隊はこの敵を二回撃退せるも第三回目は上陸を許すの止むなきに至れり。敵艦隊の砲撃は言語に絶するものあり」となっていました。軍令部次長の伊藤整一中将、や

がて戦艦大和の沖縄特攻作戦で司令長官として大和と運命を共にした人ですが、「そんな子供だましのような文句は必要ない」と二回撃退を削ってしまった。陸軍は納まらず、結局は原案から「陸軍守備隊」と「敵艦隊の苛烈な砲撃」、このお互いの面子に関わる字句を抜いて、妥協が成立したんだそうです。何とも詰まらないことにこだわったものですが、十六日未明には、中国四川省の成都を飛び立ったB29四十七機による北九州爆撃が行われました。十七年四月以来、二度目の本土空襲でしたが、初めてのB29であり、それはサイパン陥落と共に本格化する本土空襲を予告するものだったのです。

サイパンでは十七日、戦車四十四台を先頭に夜襲を決行しましたが、夜明けと共に頓挫し、戻って来たのは十数台。十八日にはアスリート飛行場が占領され、日本軍はわずか四日間の戦闘で組織的な戦闘力を失って、中央山地に後退していったのです。井桁参謀長からは、悲観的な電報が届きました。「ワガ掌握中ノ部隊ハ三個中隊ノミ、他ノ諸部隊ノ状況ハ全ク不明ナリ」。参謀本部の返電は「天皇ヨリ井桁ニ命令ス。アスリート飛行場ヲ死守スベシ」。井桁もかんかんになって「デキナイコトハデキナイノダ」と打ち返しましたが、そのアスリート飛行場では早くも二十一日には米軍機の発着が始まり、制空権は完全に奪われたのです。

この間、大本営が「これにさえ勝てれば」と大きな期待をかけたのが、「あ号作戦」による艦隊決戦です。第一機動艦隊は十九日早朝、マリアナ西方海面に進出し、午前六時半、「敵発見」の第一報が入って来ました。正規空母七隻、軽空母八隻、艦載機約九百機の大機動部隊です。海軍切つての実戦的戦術家と言われた小沢中将がとつたのは、「アウトレンジ戦法」でした。米軍機は装甲と燃料タンクの防弾装置を厚くしていますから、その分重量がかさみ、攻撃距離は四百六十<sup>キ</sup>前後です。これに対して日本機の方は、攻撃一点張りの軽量、七百四十<sup>キ</sup>の攻撃が出来ました。この利点を生かして、味方空母は敵の攻撃圏外に置いて、遠距離から攻撃隊を発進させ、先制攻撃により一挙に勝敗を決しようというのです。

小沢中将は午前七時二十五分、敵との距離五百<sup>キ</sup>で第一次攻撃隊二百四十七機を発進させました。問題は、パイロットが少々荷の重いこの攻撃をどうこなすかでしたが、攻撃隊の中心は第九期甲種飛行予科練習生。前年十二月に鹿屋基地に配属になったばかりで、飛行時間は百時間から百五十時間。新鋭機の「彗星」では離着陸が出来る程度で、ほとんど着艦経験のない者ばかりです。攻撃した後は母艦に戻れませんから、グアム島に一旦着陸して燃料補給を受け、再び攻撃に向かう予定になっていました。これでは訓練二年、実戦で鍛えながら平均飛行時間六百時間の米軍パイロットには、とても太刀打ち出来ません。午前十時半、第二次攻撃隊八十二機を発進させましたが、小沢艦隊が待ちわびた「ト連送」、片仮名のトを打ち続ける「全軍突撃セヨ」の入電は、いくら待ってもなかったのです。

米軍リーダーは午前十時、西から接近する日本の攻撃隊を捉えました。ミッチ

ヤー中將は直ちに四百五十機の全戦闘機を発進させ、待ち伏せ態勢をとらせて高度から攻撃させたのです。重い爆弾を抱えて二時間半も飛んで疲れている上、装甲の薄い日本機です。ばたばた撃ち落とされました。どうにかすり抜けて敵艦隊の上空に達しても、VT信管を備えた対空砲火に次々と撃墜されたのです。それはアメリカ側が「マリアナの七面鳥撃ち」、こう呼んだほど、一方的な戦闘でした。動きの鈍い七面鳥を落とすのは、雀を捕まえるより易しいというわけです。VT信管というのは、電波を発射して目標に接近すると、その反射を感知して弾薬を爆発させる信管で、高射砲の撃墜率向上に原爆開発並みの巨費を投じて開発したものです。このVT信管といいレーダーといい、日本は科学力でも完敗でした。

小沢艦隊は「アウトレンジ戦法」でしたから、敵機の攻撃こそ受けなかつたものの、潜水艦攻撃で主力空母二隻を失ってしまいました。旗艦大鳳はミッドウェイ敗戦の教訓を生かして、五百キロ爆弾の直撃にも耐えられるように飛行甲板を強化した最強の空母のはずでしたが、それがたった一本の魚雷の衝撃で、ガソリントークから洩れていた気化ガスが艦内に充滿し、午後二時半、突如大爆発を起こして横転したのです。これより先、午前十一時半には歴戦の空母翔鶴が三本の魚雷を受けて、千三百人の乗組員を巻き込んで沈没しました。小沢艦隊は二十二日、沖繩の金城湾に帰ってきましたが、途中で空母飛鷹が撃沈され、艦載機三百九十五機を失って再起不能の状態に陥つたのです。

マリアナ沖海戦の結果は、日本側が沈没空母三隻、中小破空母四隻、戦艦一隻だったのに対し、アメリカ側は空母二隻、戦艦一隻が小破しただけ。飛行機の損害も撃墜三十七機、燃料切れによる不時着八十機でした。ところが大本営は二十三日、「敵空母五隻、戦艦一隻以上ヲ撃沈破、敵機百以上ヲ撃墜。我方ハ空母一隻、付属油槽船二隻及ビ飛行機五十ヲ失エリ」と発表したのです。軍令部から参謀本部に回された文案には、「国民戦意と前線士気に及ぼす影響を考慮したい」との理由がつけられていました。米軍のサイパン上陸の際、発表文に「いやもんをつけられた陸軍では、「真相の発表を切望する」。こんな当て付けのような言葉をつけて、海軍側に返したそうです。

マリアナ沖海戦の大敗により、制空権、制海権は完全に米軍に奪われ、サイパン奪回作戦を不可能にしました。東条参謀総長は六月二十四日、嶋田軍令部総長と共に「サイパン奪回の企図放棄」について上奏しましたが、「機密戦争日誌」はこう書いています。「即ち、帝国はサイパン島を放棄することとなれり。来月上旬中にはサイパン守備隊は玉砕すべし。最早、希望ある戦争指導は遂行し得ず。残るは一億玉砕に依る敵の戦意放棄に俟つあるのみ」。サイパン玉砕の運命が決まった日でしたが、これをきっかけに東条内閣倒閣工作、さらには東条暗殺計画までが姿を現わしてくるようになります。

開戦後、終戦和平へ向けていち早く動き出した一人に、元首相の海軍大将岡田啓介がいます。戦後の首相吉田茂は、岡田と共に動いて終戦四カ月前の昭和二十年四月十五日、軍事上の造言飛語を流したとして憲兵隊に逮捕されることになるのですが、その吉田は岡田について、「狸も狸、大狸だが、それも国を思う大狸だ」。こう言っています。岡田は軍人としての果敢さだけではなく、搦め手から攻める柔軟さも持ち合わせている人でした。

岡田はまた、当時の日本では有力な情報網を持つ数少ない一人だったのです。長男の貞知茂は昭和十九年十二月に海軍中佐で戦死しますが、軍令部作戦課の参謀。娘婿の迫水久常はエリート大蔵官僚で、当時は企画院の課長。そして義弟の娘婿が参謀本部作戦課参謀の瀬島龍三少佐です。政府、陸海軍の中枢にいる三人と毎月一回会食したのですが、これが情報交換のいい機会になりました。岡田は「いろいろな情報を聞けば聞くほど、じつとしておれなくなった」と言っています。「このまま戦争を続けて行けば、日本は国力の最後まで使い果し、無残な滅び方をしなければならぬ。勝負がはつきりついたからには、一刻も早く終結させる道を考えた方がよい。今のうちに救えるものなら、何らかの手を打たなくちゃならぬ。ただ滅びるに任せては、不忠の至りだ」

岡田は、どうすれば適当な方法で戦争を終結させるかを、真剣に考えました。「終戦ということ、戦争を始めた内閣には出来ないことだ。しかも東条のやり方を見てみると、戦争一本槍で突っ走っているばかりだ。戦争をやめる方向へ持つて行くには、この東条内閣を倒すことが第一歩だ」。そう思い当たったということです。ただ、今の時局に倒閣運動をやっても、成功することはあり得ない。東条が面目を損なわずに、首相の地位を去るようにした方が上策だ。それには、東条が参謀総長に転出させるように、取り計らうことだ。昭和十八年八月八日、東条がまだ参謀総長を兼任していない時でしたが、内大臣として天皇の側近中の側近である木戸幸一を動かそうと、迫水に言い含めて木戸の所にやったのです。

木戸はこう言います。「内大臣というものは鏡のようなものであって、世論や世間の情勢を映して、そのまま陛下にお目にかけるようなものだ。もし世論が、東条内閣に反対だということになったら、その時は陛下にお取り次ぎをする。自分はいくまで東条内閣を支持するつもりはない」。そこで、迫水が突っ込みました。「世論とは、どういうものか」と。新聞の論調が世論だとするなら、新聞は検閲制度で口を封じられている。議会だって翼賛政治だ。たとえ、内心東条に反対している者がいても、表に出せる状態ではない。すると木戸は、こう言ったということです。「世論とは、そういう形の上のものばかりでもあるまい。例えば重臣たちが、一致してあることを考える。それも一つの世論ではないか」。岡田はこれを聞いて、「いい暗示だ。東条を退かせるには、これが最も有力で、かつ手近

「な道だ」と、毎月重臣会合を開くことにしたのです。

重臣とは、首相と枢密院議長の経験者を言いますが、近衛文麿、若槻礼次郎、広田弘毅、平沼騏一郎に、陸軍の阿部信行、海軍から岡田と米内光政の七人の重臣がいました。後継首相の選考は、昭和十五年に最後の元老西園寺公望が亡くなってからは、内大臣が重臣の意見を聞いて推薦するのが慣例になっていましたから、重臣会合に東条を呼んで戦局悪化に対する責任を追及して引きずり下ろし、終戦への道を模索しようとしたのです。十月、会場を華族会館に決めて東条に招待状を出したのですが、その口上はこういうものでした。「これまでは、いつも総理の招待に預かりご馳走になっていますが、お返しの意味で一席お招きかたがたご意見を承りたい」。ところが東条もさるもの、「自分一人では、ご意見を聞いたり話をしたりするのに差し支えるから、閣僚を同伴したい」

ですから、せつかくのアイデアも、重臣の結末は出来たものの、対東条という点ではお座成りなものになりましたし、また「聖戦」が建前になっている当時は、戦争收拾を正面から論じることが、まだまだ不可能でした。それに東条には昭和天皇の厚い信頼があったのです。東条は「東条の内奏癖」、こう陰口されるくらい、頻繁に天皇に会って前後の事情、将来の見通しなど、事細かに報告していましたから、それが陸軍の独断専行、いい加減な言い訳に不満を感じていた天皇の信頼となっていました。東条に辞職を強いる方法がないまま、手詰まり感が感じられていましたが、岡田は「いつかは機会はきつと来る。焦っては事を仕損じると、気長に待つことにした」と言っています。

そしてその機会は、昭和十九年二月、東条が参謀総長を兼務した時、海軍大臣の嶋田繁太郎も軍令部総長を兼務したことからやって来たのです。高松宮は日記に書いています。「軍令部、海軍省トモアキレカヘツテ、ヨロコブモノ一人モナシ」。何でも東条の言いなり、あれでは東条の副官だと、「嶋田副官」のあだ名がつくほど海軍部内の信望を失っていました。海軍の長老である岡田は矛先を嶋田に向け、嶋田を海軍大臣から退かせることで東条内閣にクサビを打ち込もうと、海軍部内の仕事を始めたのです。嶋田は、海軍の大御所である伏見宮が軍令部総長時代、その下で作戦部長、次長を務めて、「宮様の寵児」と言われるくらい可愛がられていましたから、岡田は六月四日、まず伏見宮の同意を取り付けました。

さらに、次の海軍のトップの用意として、部内で信望の厚い米内と元連合艦隊長官末次信正の現役復帰を考えたのです。ところが末次は、いわゆる「艦隊派」の強硬論者、米内と会っても口をきかないほどの仲の悪さです。岡田に言わせると「末次はどうでもよかつたが、米内を円満に現役に戻すには、海軍部内を纏めることが必要だ」ということで、翌日の五日、戦後外相になる藤山愛一郎邸で二人を秘かに会わせ、協力を確約させました。岡田は、内大臣の木戸や高松宮にも嶋田に辞職勧告することを知らせて、着々と外堀を埋めていったのです。

それでも木戸は、この段階では「内大臣が上奏して政局転換を図ることは、宮中クーデターになるので出来ない」と、東条本人が手を挙げるのを待ち続ける態度でした。ですから嶋田問題も、とりあえずは調停役になって丸く収めようと、東条が戦況報告に参内した六月八日、話題が深刻なものだけに、別の話を糸口にして切り出したのです。折から進行中のインパール作戦では、作戦がうまくいかずに師団長が更迭されていました。「大変なようです。師団長が更迭されたとか」。軽い気持ちで口にしたのですが、東条には笑い飛ばすような度量はありません。見る見る顔を紅潮させ、「そんなことをどこから聞かれたか？ 国防保安法にも抵触する容易ならんことだ。軍に関する悪質な造言は、たとえあなたでも許せませんぞ」。木戸の顔色も変わり、「何を言うか。内大臣として国の大事を聞いて何が悪い」。睨み合いとなり、東条が「言葉が過ぎた」と折れたので、その場は収まりましたが、木戸の心も東条から離れていきました。

岡田が嶋田に、海軍部内の要望として辞職を迫ったのは、米軍がサイパンに上陸した翌日の十六日です。嶋田は「今辞めるのは内閣を潰す結果になる」と拒否しましたが、相談を受けた東条もまだ樂觀していました。陸軍幹部を集めての対策協議では、「策動している連中を一時拘束して、裏面工作を阻止すべきだ」。こんな強硬論も出ましたが、軍務局長佐藤賢了中将の「事を大きくするより、元凶は岡田らしいから、あの爺さん呼び出して詰問し、謝罪させたらいいでしょう」。この意見で、岡田謝罪会見の機会を作ることにしたのです。

しかし、さすがの東条も、天皇に絶対確保を約束したサイパンの戦況悪化、ことにマリアナ沖海戦の大敗には動揺したようです。二十三日、防衛総司令官の東久邇宮陸軍大将を訪ねて、「戦争の前途も不利となり、内閣も行き詰まってきたから、自分は辞めようと思う」と、初めて弱音を吐いたのです。東久邇宮は「だから私は、はじめから戦争をやってはだめだ、といったではないか。しかし今となってやめるというのは、無責任きわまる。やめてもいいが、戦争の後始末をどうする考えなのか、講和をするのか、一応善後策を立ててからおやめなさい」。こう言ったところ、「まだはつきり考えていない」と言ったが、「東条は毎日の激務に追われて、ものを考える余裕もないらしかつた」と、日記に書いています。東条内閣からの転換が必要だと考えていた東久邇宮が、一応東条の辞職を止めたのは、四月に近衛と話し合ったとき、「このまま東条にやらせた方がよいと思う。折角、東条がヒットラーと共に世界の憎まれ者になっっているのだから、それが途中で二、三人交替すれば、誰が責任者かはつきりしなくなる」。この近衛の意見に東久邇宮も賛成し、戦争責任が天皇に及ばないよう、東条に全責任を負わせることで一致したからなのです。ところが東条の方は、思いもかけず東久邇宮から激励されたととって、気を取り直し、倒閣に動いている重臣グループを逆に内閣に取り込むことで、政局を乗り切ろうと考えるようになります。

陸海軍のサイパン奪回作戦の協議では、海軍側が陸軍の飛行機を百機から百五十機借りて、空母から発進させるプランを出していました。しかし陸軍側は「制空権も制海権もない現在、洋上飛行の訓練も受けていない陸軍機にはとても無理だ」と応じません。東条は参謀総長として「サイパン放棄」の方針を打ち出し、海軍の方も陸軍機が借りられず、陸軍部隊の増援もしないというのでは意味がないと、二十四日の「サイパン奪回放棄」の上奏となったのです。天皇は終始無言でした。天皇の沈黙は、不同意を意味します。天皇は元帥会議に諮問されたのですが、結論は統帥部の決定通りでした。サイパンからは「歩兵一連隊二加フル二六大隊程度ヲ要望ス。尚、海軍ノミナラス、陸軍航空ノ進出モ希望ス」と打電してきましたが、大本營の返電は嘘もつけず、「増援ハ之ヲ行ワザルコトト決定セラレタリ」と、冷たいものでした。

高松宮は、この日の日記に二倍くらいの大きな字で「戦況記録ヲ止メル」と殴り書きしています。全八巻の膨大な「高松宮日記」で特徴的なことは、作戦電報を詳細に書き写していることでしたが、サイパン放棄でもはや敗戦は避けられない、皇族としてやるべきことは別にある、と決心されたのです。日記にはこの後、弟宮としての立場から、天皇への直言が随所に見られるようになります。七月五日には秩父宮に会って、「陛下が依然形式的なこと、お兄様に申し上げてほしい」と頼んでいます。内大臣の木戸や宮内大臣松平恒雄、侍従長百武三郎とも、天皇について、かなり突っ込んだ話し合いをしています。

「陛下ノ御性質上、組織ガ動イテキル時ハ邪ナコトガ才嫌ヒナレバ筋ヲ通スト云フ潔癖ハ長所デイラツシャルガ、組織ガソノ本當ノ作用ヲシナクナツタトキハ、ドウニモナラヌ短所トナツテシマフ。今後ノ難局ニハ最モソノ短所ガ大キク害ヲナスト心配サレルノデ、サウシタトキノ御心構ヘナリ処置ニツキ今カラ才考ヘワ正シ準備ヲスル要アリ」。組織がその本当の作用をしなくなつた時というのは、天皇には悪いことは何も知らせない。戦果は常に水増し、燃料でも天皇が心配しないよう油は十分あると、嘘の報告で固められていることを言います。しかも天皇が、筋を踏み外すことが全く嫌いなため、内大臣は政治向き、武官長は軍事、宮内大臣は宮中関係、侍従長には側近のことと、それから少しでも出たことを言うところご機嫌が悪く、ご自身も決して仰せにならない。高松宮は日記に「何シロ今日ノ如キ、憲法々々ト仰ツテモ、ソノ運用ガ大切ナル時ニ、今ノ様ナ有様デハ、例ヘ天皇トシテ上御一人デモ万世一系ノ一ツノツナガリトシテ、ソレデハ余リニ個人的スギルト思フ」と、強い不満を書き残しています。この「高松宮日記」は平成七年、喜久子妃殿下が公刊に反対する宮内庁に対して「差し止める権限が宮内庁にあるのですか」と確かめられ、妃殿下の英断で出版されたもので、お陰で戦争中の皇室や軍部の動きが手にとるように分かるわけです。

東条から岡田に呼び出しがかかったのは、六月二十七日でした。岡田邸の門前

には、脅しをかけるためでしょう。「身辺警護」の名目で立哨用のボックスが据えられ、軍服姿の憲兵が立つようになっていました。岡田は、心配する家族に「まあ、東条の果し状だなあ」。こう言つて「この対決に負けたらいかんぞ、侍の子岡田啓介！」と、気を奮い立たせて出かけたんだそうです。東条は、言葉こそ丁寧。「閣下が海軍大臣更迭に若い将校に動かされ、殿下までわずらわしたりするのは、内閣に動揺を来すことになりまますので甚だ困ります」と切り出しました。岡田が「殿下のことは関知しない。若い者に動かされたのではなく、嶋田ではもう海軍が収まらぬ。私は政府のためと思つてやつているのだ」。こう切り返すと、東条は「お慎みにならないと、お困りになるような結果を見ます」と、暗に脅しをかけてきます。岡田は「見解の相違だ。私は私の考えを捨てない」と言い切り、三十分間の対決は正面衝突のまま、物別れに終わつたのです。嶋田もこの日早朝、伏見宮を訪ねて、「只今政界には、海軍を使つて内閣を倒そうとする陰謀があります。殿下が東京にいられることは、否応なしにその渦中に巻き込まれることになります」。こう言つて、熱海の別邸に引き籠もらせました。

海軍省の廊下には誰が書いたのか、「東条、嶋田を殺せ。GFは無力化した」。GFというのは連合艦隊のことですが、「速やかに和平内閣をつくるべし」。こんなピラが貼られました。高松宮は、日記に「総長室前ノ番兵一人ダツタノガ二人になつて、三階番兵三人ニナル。テロノ恐怖始マル」と書いています。実は東条暗殺計画が、陸海軍別々の形で密かに進められていたのです。海軍省教育局長の高木惣吉少将の部屋には、連日のように課長の神重徳大佐が入り込んで、密談を続けていました。神はソロモン海戦で艦隊参謀として果敢な作戦をやり、「神さん、神懸かり」と言われたほどの闘魂の持ち主。東条内閣ではもうダメだと、三上卓元海軍中尉と連絡をとり、東条暗殺に協力を求めていたのです。三上は五・一五事件で犬養毅首相を射殺し、禁固十五年の判決を受けていましたが、恩赦で出獄し、右翼の旗頭になっていました。最初は「プロの右翼なんて当てにならよ」と言つていた高木でしたが、サイパン放棄を聞いて決意します。高木は後で「読みが浅かつた。決行していたら、陸海軍の対立で終戦がやりにくくなつたらう」と反省していますが、六月二十四日の夜、岡田を訪ねて暗殺計画を打ち明けたのです。

岡田自身、二・二六事件で襲撃され九死に一生を得ています。テロは最も忌むべき卑劣な手段でした。「とんでもないことだ。多少事が思い通りに進まなくても、決して軽挙すべきでない」と叱りましたが、信頼している高木までが暗殺を言い出すようでは、もう抑えることが出来ないところに来ていたのかも知れない。そう思つて、二十七日の東条との対決には悲壮な決意で臨んだと言つています。高木は、高松宮も訪ねました。「戦局が思わしくないせいか、独り言を言う変な癖がつかました」と断つた上で、「私どもが勝手にやることですが、気に



かかるのは東条を殺した後です。その時に力をお貸し頂ければ幸いです」。高松宮は「あなたの独り言癖が私にも移ったようだ」と前置きして、「私が支持し、期待していると考えてもらって結構だ」と言われたそうです。

七月二十日頃、三台の車を東条の車に体当たりさせる計画でしたが、神が連合艦隊参謀に転出し、東条内閣も総辞職したので計画だけに終わりました。神は終戦一カ月後、北海道へ連絡のため練習機で飛ぶ途中、エンジン不調で津軽海峡に不時着水、他の搭乗員はアメリカの駆逐艦に救助されたのに、泳ぎの得意な神だけは見つかりませんでした。恐らく自殺だったのでしょう。

陸軍の暗殺計画の中心は参謀本部参謀、二十七歳の津野田知重少佐です。父親も陸軍少将という軍人一家で、支那派遣軍参謀から戻ってきて戦争が絶望的になつて知っていることを知り、東条を除かなくては国は救えないと思ひ詰めていました。皇宮警察の柔道師範牛島辰熊と献策書を作り、二人が師と仰ぐ石原莞爾中将、東条に追われて予備役になつていた石原の意見を聞こうと、六月三十日、山形県の鶴岡に訪ねたのです。献策書は早期停戦を強調し、最後の欄外に一行、「万止むを得ざる時には、東条を斬る」の書き込みがありました。それを讀んだ石原も、赤鉛筆で「斬るに賛成」と書き加えたそうです。

ところが、計画は思わぬところから洩れてしまいました。津野田は天皇に早期停戦の考えを伝えてもらおうと、士官学校で三期先輩の三笠宮少佐を訪ねたのです。三笠宮も「国家滅亡の危機が迫りつつあるのを感じて、苦悶しているところだ。私なりに努力してみよう」と同意しましたが、七月十五日、大宮御所で貞明皇太后と話しているうちに、戦争の行く末を心配する母親を安心させようと、つい口を滑らせてしまいました。驚いた皇太后から「重大なことになる前に、すぐその筋の者に知らせなさい」と叱られ、深夜、兵務局で治安問題を担当する黒崎貞明中佐を呼び出して相談したのです。津野田は作戦指導のため中国戦線に出張中で、召喚して事情を聞くには、上司への手続きが必要でした。報告を受けた那須義雄兵務局長は東条直系の人でしたから、「見せしめのためにも断固たる処置が必要だ」と、東京憲兵隊長の四方諒二大佐に徹底捜査を命じたのです。帰国した津野田は十九日に逮捕され、軍法会議で禁固二年執行猶予の判決を受け、官位を剥脱されました。

東条に直言して、「死の戦地」へ飛ばされた将校もいます。陸軍省戦備課の塚本清彦少佐で、やはり義兄が中将という軍人一家でした。倒閣運動をしていた通信院工務局長の松前重義、戦後東海大学の総長をされた松前さんの同志で、マリアナ空襲が始まった六月十一日の夜、東条を訪ねて「近衛公などの挙国一致内閣を作り、閣下は軍事に専念すべきだ」と進言したのです。東条は翌朝、富永次官に「生死を賭けて戦っている最前線の苦勞も知らずに、口舌を遊ぶ若い者がいる。サイパンへ行かせたらどうだ」と、第三十一軍参謀への転出を命じました。塚本

は帰宅して奥さんに「自分は東条によって遠島流罪になった」と言ったそうです。しかし、もうとてもサイパンへは行けず、グアムに留まっているところへ米軍の上陸となりました。ヤップ視察中でサイパンへ戻れず、グアムで指揮をとっていた小畑第三十一軍司令官と共に八月十一日、戦死したのです。三十四歳でした。

戦争終結の意見具申をして中央を追われたのは、参謀本部戦争指導班長の松谷誠大佐です。七月二日、戦争指導班内の検討で「今後帝国は作戦的に大勢挽回の目途なく、しかもドイツの様相も概ね帝国と同じくジリ貧に陥るべきを以て、速やかに、戦争終結を企図するを可とする」。こういう結論を出し、参謀次長に提出したのです。陸軍部内はもちろん、政府機関で「勝利貫徹」以外の戦争終結が公式に検討されたのは開戦以来初めてのことで、戦争指導の大転換を促すものでした。しかし後宮参謀次長は、「必勝の信念」一本槍の東条にはとても理解して貰えないと、東条への提出は止めさせましたが、松谷は「それでは職責を全うしたことになる」と、東条に直接ぶつかったのです。東条は無言で終始したと言われますが、「このような意見の者を、軍の中枢に置いておくわけにはいかない。国論分裂の危機を招く」と、前線転出を命じました。ただ松谷の場合は、後宮参謀次長が「戦争指導班長である以上、戦争終結のあらゆる可能性を研究するのは当然で、懲罰的な前線追放は如何なものか」と取り成し、翌日三日付の支那派遣軍参謀への転出で済んだのです。

サイパンでは、日本軍はじりじり北へ追い詰められ、七月六日、最後の時を迎えていました。南雲中将、斎藤中将、井桁少将は、翌日未明の玉砕攻撃を決定、大本営に「イマ、太平洋ノ防波堤トシテ骨ヲ埋メントシ、聖寿ノ無窮、皇国ノ弥栄ヲ祈念ス」。こういう訣別電報を打って、洞穴内の司令部で自決したのです。七日未明から始まった最後の突撃は、小銃ももう十人に一挺程度しかなく、手榴弾だけの者、棒に銃剣を縛りつけた者もいましたし、竹槍の者もいました。ただ全員に共通していたことは、撃たれても撃たれても絶対に引き返さず、喊声をあげながら血塗れになって突き進んだことです。海岸と道路は日本兵の死体で埋まり、四千三百三十一を数えたと言われます。

サイパン玉砕の大本営発表は、東条内閣が総辞職した十八日になってからでしたが、途中の戦況発表が「戦線は彼我錯綜し、諸所に紛戦を惹起しつつあり」。これでは、誰の目にももう絶望的なことは明らかでした。徳川夢声は九日の日記に「サイパンは玉砕ですってさ」と妻が報告する。何所から聴いてきた話か知らないが、私には確実と思える」と書いています。そして翌日の日記に「軍人軍属はともかくとして、沢山の非戦闘員、老人、女、子供は何うケリがついたのであろうか。玉砕と言っても、女や子供たちまで殺され尽くし、自殺し尽くしたとは、一寸考えられない。生き残ったとするとどうなるか。敵兵どもは、これを捕まえて如何なる処置をとるか」。置き去りにされた一般市民に思いを寄せています。

天皇も心配されていました。東条がインパール作戦中止を上奏した一日、「もはや救出奪回の途なしとすれば、サイパン在留の多数同胞、一般民間人の運命はどのようなようになっておるか」と聞かれています。東条の答えは「遺憾ながら大本营としては、これに対する処置はなく、現地司令官に一任と決定しております」。ところが、その現地司令官は、民間人の保護には何の方針も示さなのまま自決してしまつたのです。戦争といえ、これまで常に外地で、住民を巻き込んで戦つたことのない日本軍です。現地司令官の頭にあるのは戦うことばかり、大本营も占領地統治の方針は決めても、住民保護には全く手付かずというのが実情でした。

それでもサイパンが陥落すれば、B29の本土空襲が現実のものになるとして、政府も遅蒔きながら六月三十日の閣議で「学童集団疎開促進要綱」を決め、京浜、名古屋、阪神、北九州など十三都市の国民学校三年生から六年生を疎開させること、七月七日には沖繩の老幼婦女子と学童八万を本土へ、二万人を台湾に疎開させることを相次いで決定しています。そして、マリアナ基地を発進した最初のB29一機が、一万呎の高空から東京を偵察していったのが十一月一日。二十四日には八十機が三鷹の中島飛行機工場を爆撃、七十八人の死者を出しましたが、本格的な本土空襲が始まっていきます。

東条は政権維持に、まだまだ強い意欲を示していましたが、「反東条」の動きは重臣グループだけではなく、言わば政府に協力させる目的で作つた大政翼賛政治会にも広がっていたのです。七月六日の代議士会は、さながら「東条内閣打倒決起大会」になってしまいました。「人心を一新したいが、如何なる行動をとるか」——この発言をきっかけに、一人が「東条首相だけ残して後は全面改造」と発言すると、「バカ」、「引つ込め」の野次で騒然です。議会開会中はいつも四方憲兵隊長が軍服姿で現われ、無言の威圧を加えていましたから、表に出せずにくすぶっていた不満が、多数であることに力を得て一気に爆発したのです。代議士会は「挙国一致体制を具現するよう、政府に善処すべしと要請する」。この意見を採択して閉会しましたが、倒閣大会を演出したのは三人の若手代議士でした。椎名悦三郎、赤城宗徳、中谷武世と、戦後皆さんにもおなじみの政治家が、秘かに「憂国同志会」を結成し、いざという時には「不信任決議案」まで用意して臨んでいたのです。

彼らの倒閣工作の重点は、戦後首相になる岸信介でした。岸は昭和十一年、東条が関東軍参謀長をしていた頃、農商務省から満州国の実業部次長として出向し親しくなつた間柄です。当時満州では「ニキニスケ」、東条英機と満州國務院総務長官をした星野直樹の「ニキ」、岸信介に日産の鮎川義介、満鉄総裁の松岡洋右の「ニスケ」は、満州の軍や政財界を牛耳る「切れ者だ」と言われたものでした。岸は東条内閣発足と共に四十四歳で商工大臣に抜擢され、軍需省の発足で次官ながら國務大臣になっていました。椎名が岸に狙いを絞って働き掛けを強めたのは、岸

の下で商工次官をしたからでしたが、岸の方も東条の独善的なやり方に疑問を持ち始めていた頃だったのです。

翼賛政治会の騒ぎに、東条は治安関係閣僚、側近の幕僚を緊急招集しました。

内務大臣は反対議員の全員検挙、富永陸軍次官も戒厳令を主張しましたが、反対議員の数が余りにも多過ぎます。結局東条の「国内一致し微動だにしておらんことを、対外的にも見せなくてはならない時だ。強硬なやり方は避けた方がいい」

……この意見で、個々の処置で対処することになったのです。東条はすぐ富永次官に松前重義を召集し、前線に出すことを命じました。高松宮は日記に「カヽル種類ノ召集ガ此ノ度七十数人アツタト云ハレル。実ニ憤慨ニ堪ヘヌ。陸軍ノ不正デアルバカリデナク、国権ノ紊乱デアル」と憤慨していますが、その高松宮も八月定期の異動を待つて、嶋田により横須賀砲術学校の教頭として中央を追われます。四方憲兵隊長はは東京憲兵隊全員を非常召集し、「重臣を含め反対勢力を徹底してマークしろ。尾行や内偵も堂々とやって威圧しろ」と訓示したそうです。

岸が東条との対決を決意したのは、七月十一日の定例閣議でした。東条がサイパン玉砕を閣僚に告げたのですが、岸が「今が戦争の天王山ではないか。サイパンに総力を結集して決戦すべきではないか」。こう発言したところ、東条から「戦争のやり方は大本営が考えることだ。何も知らない貴様みたいな文官に何が分かるか」と怒鳴られたのです。岸はこの後、椎名ら三人を集めて言っています。「この数日が日本の興廃を占う。われわれの戦場になるはずだ」。彼らの倒閣運動に加わることの宣言でした。岸は、東条が政情不安を内閣改造で切り抜けようとしていることを掴んでいました。改造となれば、真つ先に自分に辞任を求めてくるだろう。明治憲法では、首相に閣僚の罷免権はありません。辞任を求められても応じない。「閣内不一致」で総辞職になると、東条との「抱き合い心中」を決意したのです。

一方、陸軍最高幹部の緊急会議では、陸軍から阿部、海軍から米内、政界からは広田の三重臣を入閣させ、東条体制を強化する方針が決まりました。阿部は翼賛政治会の会長だから問題ないとして、最大の難関は米内です。海軍を東条内閣に引き付けるためにも絶対必要だとして、佐藤軍務局長が海軍工作に当たることになりました。東条は、こうして電撃的な内閣改造で乗り切ろうと、そのお墨付きを得るため十三日午後、内大臣の木戸を訪ねたのです。「この際、サイパン失陥の責任問題はしばらくご容赦願って、今はただ戦争完遂に邁進することを決心しました」。こう切り出したのですが、木戸が出してきた条件は東条には意外なものでした。第一に、総長と大臣の兼任を分離して統帥権を確立すること。第二に、嶋田海相更迭。第三に、挙国一致の政府体制を整えること。この三条件を示されたのです。東条は「これは私に詰め腹を切らそうとするものだ。ご信任は去った」と辞意を洩らしましたが、富永や佐藤から「総長兼任を辞めて、三条件に沿

つて改造を断行すればいい」と励まされ、ここから最後の足掻きが始まります。

まず嶋田を呼んで、海相辞任を求めました。嶋田には軍令部総長に専念して貰い、海相は次官の沢本頼雄とする。自分は陸相に留任するが、参謀総長には後宮次長を昇格させる。つまり、形の上では総長分離、海相辞任の二つの条件を満たしつつ、後任には今までのナンバー2を昇格させて、実体は変えない狙いです。

東条は十四日、後宮参謀総長を内奏したのですが、「総長のロボット化だ」と、予想もしなかった反発が陸軍部内から起こったのです。参謀本部幕僚を代表して、「後宮大將が総長では、戦局がこのような今日、とてもやっていけない」と、東条に反対意見を持つてきたのは服部作戦課長、言わば東条子飼いの服部でした。

結局十七日、参謀総長を関東軍司令官の梅津美治郎大將とし、その後任に山田教育總監を回し、總監には杉山元帥とする、異例の内奏取り消しとなったのです。

海軍も躓きました。海軍大臣人事は陸軍と違って、前任者が後任者を推挙し、伏見宮の同意を得ることが慣例となっていました。伏見宮から「沢本では海軍部内が団結するとは思えない」と、言下に否定されたのです。急遽、呉鎮守府長官の野村直邦大將にすることになりましたが、この野村も直後の東条内閣総辞職で、これまた異例の「一日大臣」で終わることになります。

それでも東条は、形だけは二条件をクリアする見通しがつき、残るは「挙国一致内閣」だけだと、重臣取り込みに奔走します。しかしこれこそ、岡田が待っていたものでした。閣僚ポストを開けるため辞表を求めるのは岸に違いないと、迫水を派遣しましたが、岸はすでにその決心を固めていました。東条内閣で書記官長になった星野直樹が、岸の所へ深夜の使者としてやって来たのは、十七日午前二時過ぎです。辞任要請を拒否され、「朝までに、君が考え直すことを忠告しておくよ」。こう言い捨てて帰っていきましたが、岸は朝になると東条を訪ねて、「もはや内閣総辞職をすべきだと思います」と、はっきり進言したのです。押問答は二時間も続きましたが、東条の岸に対する恨みは骨髓に徹したようです。國務大臣は普通なら内閣総辞職で勅選議員に推薦されるのに、岸だけはされませんでした。夕方には四方憲兵隊長がサイドカーで乗り付け、「総理の東条閣下が右向け右、左向け左と言えば、閣僚はそれに従ったらどうなんだ」と怒鳴りました。が、岸は「日本で、その力を持っていられるのは、陛下だけだ」と屈しません。

七人の重臣が「政局に関し意見を交換したい」という名目で、平沼邸に集まったのは十七日午後六時過ぎでした。一時は東条に最後までやらせることを考えていた近衛も、この時には倒閣に踏み切っていました。最年長の若槻が座長になり、「非常時に人心一新の要あり」の意見を纏めました。実は近衛、岡田、平沼、若槻の四人は事前に打ち合わせをして、重要な取り決めをしていたのです。この会議で「東条不信任」の結論を出し、木戸から天皇に伝えて貰い、倒閣の決め手にすること。東条派の阿部から通報される恐れがあるので、阿部には会議の結論を内

密にしておくことです。岡田はこの後、木戸を訪ねて上奏文を手渡ししましたが、その内容は「内閣の一部改造の如きは何の役にも立たない」と、明確に内閣総辞職を要求するものだったのです。一方、米内に対する入閣交渉は、新しく海軍大臣になった野村まで加わり、深夜まで続けられました。現役に復帰し、軍人としてご奉公する話なら喜んで応ずるが、内閣に入って東条と一緒にやることは、どうしても出来ない」と、きっぱり断ったのです。

こうして東条は、三番目の条件「挙国一致内閣の確立」を実現出来ませんでした。その東条が、最後の望みをかけたのが天皇です。自分の進退を天皇の判断に委ねることにして、十八日朝拝謁を願ひ出たのです。しかし木戸は、それに先立って天皇に重臣会議の結論を話し、「首相がこれから上奏される内容は存じませんが、いま言上した重臣の動向にご配慮の上、世論の赴く所と背反しないよう、お話されますように」。こう念を押していました。東条が「諸般の事情に鑑み、総理大臣の辞職をお許し願ひたいと考えて参りました」と言うと、天皇はただ一言「そうか」と言われただけでした。東条が期待した次の遺留の言葉はなく、最敬礼をして下がるしかありません。午前十一時二十分、辞表を提出したのです。

総辞職の発表は二十日になってからでしたが、この噂は瞬く間に駆け巡ったようです。近衛と一高同期で、何かと近衛の相談に乗っていた作家の山本有三が国語審議委員会に出ていると、文部省の職員が「先生、万歳ですよ」と囁きます。「どこかで戦果を挙げたのか」と聞くと、「東条が辞表を出したらしい」。山本も万歳を叫びたくなった、と言っています。近衛は帰宅して千代子夫人に、短刀で相手を突き刺すような仕草をして、「きょうは昭和の入鹿をやったよ」と言ったそうです。大化の改新で先祖の藤原鎌足が、中大兄皇子と共に蘇我入鹿を倒した思いだったのでしよう。終戦の時、陸軍大臣として自決した阿南惟幾はセレベスの第二方面軍司令官でしたが、日記に書いています。「東条大將は、今日一朝失脚するや天下の怒声罵倒に会う。同情禁じ能わざれど、この非常時突破の間、常に野心的行動を疑われ、純真至誠の見るべきものなく、驕慢にして人事を私せるは世人の不满を来し、悲惨なる結末を以て終幕せり」。本当にその通りでした。

朝鮮総督の小磯国昭と米内光政に組閣の命が下り、小磯・米内協力内閣が成立したのは二十二日です。東条の予備役編入もこの日発令されましたが、東条はぎりぎりまで陸軍大臣に留まろうと抵抗しましたし、次官の富永も陸軍を代表して小磯首相に「新内閣が戦争を継続するならば、陸軍は協力を惜しまない」と、脅しをちらつかせていました。岡田は「東条以外の者が出てくれば、自ずから戦争に対する批判も生まれてくるだろうと思っていたが、小磯は思いもかけず首相になつて有頂天になつただけだった」と回想しています。徳川夢声は日記に「新内閣ノ顔ブレ発表サル、何ダカ弱体内閣ノ感アリ」と書いていますが、杖にすがつて参内する八十一歳の町田忠治など足取りも覚束ない閣僚に、早くも「木炭バス内

閣」の声が出てきたのです。木炭が燃料の戦争中の車は始動にも時間がかかり、坂道でエンコすることはしよつ中。新内閣もパワーのなさそのままに迷走が続きますが、この話は来月「レイテ決戦と小磯国昭内閣」というテーマでお話します。